

7月7日

在シドニー総領事交流録（第7回）

リズモア市とバリナ市と日本の繋がり～姉妹都市及びフレンドシップ都市関係を通じて

6月21日及び22日に初めてリズモアを訪れました。リズモア市は、NSW州北東部の州境近くにある地方都市で、1963年に奈良県大和高田市と姉妹都市となり、日豪最初の姉妹都市関係を結びました。このリズモア市は、毎年冬至の前後の土曜日にランタン・パレードを開催し、大和高田市からのランタンも登場するとのことで、リズモア市からの招待を受け、同パレードにも参加しました。その機会に、サザンクロス大学日本センターを訪問し、リズモア市長にもお会いしました。また、リズモアは観光地のバイロン・ベイもすぐ近くで、その地方の玄関口とも言えるバリナ・バイロン・ゲートウェイ空港を経由した際に海辺の隣街であるバリナ市にも立ち寄り、バリナ市の市議会議員夫妻ともお会いする機会がありました。今回はリズモアとバリナ両市と日本との繋がりについて考えてみたいと思います（なお、リズモア市と大和高田市の姉妹都市交流については、紀谷総領事（当時）の通信が詳しいので、[こちら](#)もご参照ください）。

●地域のゲートウェイ・バリナ市

まず、初日の6月21日に、バリナ・バイロン・ゲートウェイ空港に降り立ちました。最初は「なぜリズモアの空港への便がないのだろう」と不思議に思っていたのですが、迎えに来られたフィル・ミーハン・バリナ市議会議員から、リズモアの空港は小さく大きな飛行機が着陸できないことから、バリナ空港が観光地であるバイロン・ベイも含めたこの地方の玄関口となり、それゆえ地方空港としては豪州で2番目に利用客の多い空港となったと伺いました。また、同議員のスー・ミーハン夫人（元市議会議員）にもお会いしましたが、平和教育や文化交流の活動を積極的に推進されて来た方で、以前広島を訪問した際に原爆資料館や原爆ドームを見たことを契機に、バリナ市民に対して原爆の歴史や平和の重要性を伝える活動をされ、広島市との友好関係を深めることにも尽力されてきたとのことでした。バリナ市は大阪の枚方市とも友好関係にある由で、バリナ市がNSW州40番目の自治体として日本の都市と姉妹関係を締結することを期待しつつ、バリナ市からリズモア市に向かいました（注：クレア（自治体国際化協会）では、姉妹都市関係締結には、広い分野に亘る交流促進を目指す提携文書が双方の自治体により承認されること等を統計処理の都合上定めているとのことです）。また、バリナ市は、冬に多くの鯨が現れるということで、ホエール・ウォッチングも人気があるとの話も伺いました。



フィル・ミーハン・バリナ市議会議員及び
スー・ミーハン夫人と

●サザンクロス大学ジャパン（トニー・グリーン神父日豪）センター

バリナ市から車で30分ほど移動して、リズモア市東部に位置するサザンクロス大学ジャパンセンターで開催された歓迎会に出席しました。同大学キャンパスは広大でコアアラが200頭以上も生息しているとのことに驚かされましたが、ジャパンセンターについて、ロバート・スミス同大学准教授（リズモア歴史協会会長）、バネッサ・エキンス前リズモア市長、マクラレン温子同大学ジャパンセンター・コミッティー会長、講師、フルートで出迎えてくれたブライアン・ホール君、ジャパンセンター・コミッティーのメンバー、及び関西大学からの交換留学生3名を含む方々から温かい歓迎を受けました。

同センターの正式名称は「トニー・グリーン神父日豪センター」で、同神父の戦後の日豪和解に取り組まれた足跡をビデオで拝見し、同神父が日本に滞在されていた間の新聞記事の切り抜き帳や同神父の記念品も拝見しました。こちらのセンターでは日本文化も体験できます。

なお、サザンクロス大学の日本担当マネージャー新木氏によると、同大学は日本の20近い大学と連携しており、関西大学からの学生はサザンクロス大学のコアラ・ケアセンターの活動支援のボランティアもしていたことがあり、いまでも留学生を交換しているとのことでした。余談ですが、同大学は地方大学で、自然に恵まれた環境ということに加えて、都市部の大学よりも学費が安く、また、大学卒業後に得られる就業ビザも都市部の大学よりも1年長い3年間ということがセールス・ポイントになっている由です。



サザンクロス大学ジャパン（トニー・グリーン神父日豪）センターにて、
ロバート・スミス准教授、バネッサ・エキンス
前リズモア市長、マクラレン温子氏、ブライアン・ホール君と

●リズモア市

リズモア市から招待のあったランタン・パレードは午後５時半に開始ということもあり、その前にスティーブ・クレイグ・リズモア市長に招待の御礼を申し上げる機会をいただきました。土曜日の夕方ということもあり、市庁舎の外でカジュアルな形で挨拶となりましたが、同市長からは、大和高田市との姉妹都市関係が 60 年以上に亘り活発に続いていることを嬉しく思うとした上で、リズモア市は、度重なる洪水被害の影響もあり、住民の流出が問題となっているが、なかなか住宅増設が進まない等の課題に直面しているとのことで、同市の産業育成のためにも、日本のハイテク企業の進出を検討して欲しいとの話がありました。

リズモア市は、2022 年に水位が最大 14 メートルにも達する洪水に見舞われ、本年 3 月にもサイクロン「アルフレッド」による洪水に見舞われ、市内約 30%が浸水する被害に遭ったものの、2022 年の災害を踏まえて備えは強化されていたとのことです。水災害の多い日本の取組へのクレイグ市長の関心も高く、防災分野でも日豪間で協力できるのではないかと思います。

リズモア市について付言すると、サザンクロス大学に代表される様に、この地域の一大教育拠点であり、また、総合病院も整備されていることや、気候がより温暖であることと相まって、第一線を引退された方がシドニーからも移り住んで、郊外でマカデミア栽培をされている方もおられるとのことで、同市の魅力を感じました（ちなみにマカデミアは同地域が原産とのことです）。



スティーブ・クレイグ・リズモア市長と

●リズモア市主催ランタン・パレード大和高田市マスコット「みくちゃん」を担いで
ランタン・パレードは日没後に始まりました。このパレードは、1994年にリズモア市の芸術家たちが、コミュニティーの連帯感を高め、地域を活性化することを目指して始めた市民祭りで、現在では約3万人が観閲するリズモア市の冬の風物詩となっています。姉妹都市の大和高田市から寄贈された同市マスコット「みくちゃん」のランタンもパレードに参加すべく、約50の出場ランタンの先頭集団の中で待機していました。先ほどのリズモア市長表敬の場所からランタンの待機場所までご案内いただいたゴードン及びビン両市議会議員、クレア・シドニー事務所から出張された平木事務所長（注：6月28日に離任されました）、そしてジャパン・センターで出会った関西大学からの交換留学生3人に、私も加わって、「みくちゃん」を担ぎ、リズモア市中心部を練り歩き、観客から温かい歓迎を受けました。関西大学からサザンクロス大学への留学生の一人、西岡唯人さんは大和高田高校の出身とのことで、若い人たちの姉妹都市交流が一層深まることを期待したいです。



「みくちゃん」とゴードン及びビン両議員、
ゴードン夫人、平木クレア・シドニー事務所長



「みくちゃん」市内行進の様子



関西大学からサザンクロス大学への
交換留学生 西岡唯人君と

●リズモアにおける日豪和解の意味

翌 22 日は朝から市内中心部にある戦没者記念碑を巡り、第一次大戦、ヴェトナム戦争などの記念碑と並んで立つ、第二次大戦末期のサンダカン死の行進の記念碑を訪れました。この記念碑には、1787 名の豪州軍捕虜及び 641 名の英軍捕虜がこの行進や収容キャンプで犠牲になり、リズモア市周辺地域から出征した約 40 名が含まれるとの記述があります。この記述を読み、日豪間で最初の姉妹都市関係が 1963 年にリズモア市と大和高田市の間で締結されるまでの道のりは平坦ではなく、リズモア出身のマーズデン神父、そして同神父の高校の後輩にあたり、その志を継がれたトニー及びポール・グリーン両神父（兄のトニー神父は奈良教区司祭として 1953 年に、弟のポール神父は大和高田市に 1955 年に赴任）の日豪和解に向けたご努力と、昨年 12 月に現在シドニーに住んでいるポール・グリーン神父にお会いした際の同神父のお話に改めて思いを馳せました。

その後、リズモア市郊外にある故ディック・ブレイスウェイト教授の夫人ロビーさんのお宅にお邪魔しました。同教授の父はサンダカン死の行進からの生存者 6 名のうちの一人で、父の凄絶な経験の全体像を把握したいということで、「Fighting Monster」という著書を執筆されています。さらに、同教授が 2016 年 9 月に亡くなられる前から制作が開始され 2024 年に SBC 信越放送で放映された、「78 年目の和解、遺族の軌跡」という、日本民間放送連盟グランプリ賞を受賞された、湯本和寛氏制作のドキュメンタリーも拝見しました。これらの著書・ドキュメンタリーに共通するのは、凄絶な経験をしたのが豪英の捕虜やサンダカン周辺の民間人だけでなく、日本軍関係者も犠牲者だったとの双方の観点からの描写でした。とりわけ、行進の責任者として処刑された軍司令官の子息がボルネオのサンダカンで例年開催されている慰霊祭に参加しようとしたものの、それまでは豪英側との関係者との対話もなかったことから参加を果たせず、その弟さんが対話の努力を続けようやく最近になり参加を果たせたとの話を聞き、かつての敵味方の恩讐を越えた、和解に向けての対話の重要性を再認識しました。



リズモア市のサンダカン慰霊碑



サンダカン慰霊碑の碑文

●結び

以上が今回の訪問の概要ですが、この間の関係者との懇談をアレンジしていただいたマクラレン温子さんは約半世紀前にバリナ市に移って来られた方です。その当時は、シドニーなど都市部では反日感情が強く、バリナ市でも、マクラレン温子さんが来られる直前には、地元のロータリー・クラブが日本人の交換留学生の受入れを巡り意見が真二つに割れ、反対派がクラブを去り、ようやく受け入れが認められるとの事件があったそうです。その後、マクラレン温子さんは、1990年からニューイングランド大学ノーザンリバース校（現在のサザンクロス大学の前身）で日本語を教え始められ、2000年からはサザンクロス大学コーラス・グループ「イザベラ・アカペラ」の日本公演ツアーを実施、そこで集めた寄付金を基に、2004年に同大学内に「ジャパンセンター」（正式名称はトニー・グリーン神父記念日豪センター）を設立され、2018年には外務大臣表彰及び豪州政府勲章（OAM）を授与されています。

本年は戦後80周年を迎えますが、こうした日豪の戦後和解に取り組まれた方々の弛まぬご努力に改めて敬意を表し、日豪の友好関係を一層深めていくことに努めていきたいとの気持ちを新たにしました。